

生活年齢に応じた自立活動の指導

一個別の指導計画の12年間の指導記録に着目してー

○宮尾 尚樹 (長崎県立諫早特別支援学校) 一木 薫 (福岡教育大学) 古川 勝也 (西九州大学)

KEY WORDS : 自立活動 生活年齢 12年間

I 目的

肢体不自由特別支援学校において、発達が初期段階にある児童生徒の指導は、多くの場合、自立活動が中心となっている。在学する児童生徒たちに「いつ」「何を」指導するのは指導する個々の教員の裁量に委ねられており、「生活年齢に応じた指導」について考える視点を学校として持ち供えていない現状がある。その結果、個々の児童生徒の現在の実態を基点にした指導を積み重ね、卒業までの在学期間を踏まえて指導を組み立ていく視点が不十分なことが課題となっている。

そこで、本研究では、肢体不自由特別支援学校で12年間学んだ卒業生を事例として、実施された自立活動の指導で中心となった課題を分析し、小学部・中学部・高等部のそれぞれの生活年齢期における指導の特徴等を探る。そのことを通して、前年度の目標達成度を踏まえるボトムアップの視点と、各学部の教育目標とのつながりや数年後の姿の想定を踏まえるトップダウンの視点の双方をもって指導を組み立てる必要性を明らかにすることを目的とした。

II 方法

1. 研究の対象

平成16年度から27年度にA校に在籍した卒業生Bさん。A校の高等部を卒業後、医療型障害児入所施設にて生活を送っている。入学時のBさんは、インフルエンザ脳症後遺症で、床では這って移動し、身辺処理に関しては全てにおいて援助が必要であった。「おいで」「ちょうだい」などの言葉に応じた行動が見られつつあった。

2. A校の各学部の教育目標

Bさんが在籍していた間のA校の小学部・中学部・高等部の教育目標のキーワードを以下に示した。

- ・小学部：健やかな成長、日常生活に必要な基礎的な知識・技能
- ・中学部：自ら周りの人や環境に関わる、自己選択・自己決定
- ・高等部：積極的に社会参加、社会生活を営む上で必要となる知識・技能・態度

III 結果

Bさんの自立活動における学びの履歴を表1に示した。

表1：Bさんの在学中の自立活動における学びの履歴
(本研究への情報提供について、対象者の家族から同意を得ています。)

学年	扱った指導内容	学年末の評価
小1	立位保持	右手で手すりを握って体幹を安定させることができた。
	ゲートトレーナーを使った歩行	片足に重心をかける援助をすると、もう一方の足を振り出せるようになった。
	食具の操作	皿に置いた食べ物が刺さったフォークを口に運ぶことができた。
小2	立位保持	教師の援助を受けて、壁を背にした立位保持を30秒できた。
	ゲートトレーナーを使った歩行	興味のあるものが前方にあると、それを目指して歩くようになった。
小4	ゲートトレーナーを使った歩行	教師の援助があると、角を曲がることができた。
	衣服脱ぎ	ジャンパーを脱ぐときにファスナーを下ろすことができた。
小6	手すりでの伝い歩き	腰を支える援助があると、左右どちらの方向へも手すりを使って伝い歩きができた。
	食具の操作	スプーンに載った物をこぼさずに口に運ぶことが増えた。
中1	床から車椅子への移乗	車椅子が見えると自ら近づいて、寄りかかるようにして膝立ちになるようになった。
	「終わり」を伝える発声	排尿が終わった後に、声を出すことは7割程度あった。
中3	立位での諸動作	腰のみへの援助を受けた立位が安定し、頭より高い位置にある物への働きかけが円滑になった。
	教材の選択	5日間継続して使用した教材であれば、3つの中から該当する物を正確に選べた。
高1	椅子や便座から車椅子への移乗	立ち上がってから腰をひねる動きがスムーズになった。
	発声・身振り・写真カードによる伝達	これから行う行動に合致するカードを選択するのが難しかった。
高3	床座位からの手すりを使った立ち上がり	教師が腰を少し支える程度で可能になった。
	周囲の人への伝達	机上での課題が終了すると、教師の方を向いて声を出して知らせることが増えた。

IV 考察

Bさんの学びにおいて、小学部では「健康の保持」(1)生活のリズムや生活習慣の形成に関すること、「身体の動き」(1)姿勢と運動・動作の基本的技能に関することや(3)日常生活に必要な基本動作に関するものが多くあり、健やかな成長を目標とする小学部の教育目標と概ね一致していた。しかし、食具の操作については、2年時以降扱っていないにもかかわらず、6年時に再度扱うようになっていた。このことは、6年時の指導を担当した教員が、以前の指導の経過や達成度を踏まえることなく、指導開始時にできていないと判断したことのみに着目した結果であった。また、低学年では前年度の達成状況に関わらずに立位保持や補助具を使った歩行の指導がそのまま継続されていた。中学部では、「人間関係の形成」(1)他者とのかかわりの基礎に関すること、「身体の動き」(4)身体の移動能力に関するものが中心となり、自ら周りの人と関わることを目標とする中学部の教育目標と概ね一致していたが、Bさんが自ら周りの人に関わる姿の想定は指導する教員によって異なり、発声で伝えることや選択することは単年度の指導で終わっていた。高等部では、「人間関係の形成」(4)集団への参加の基礎に関すること、「環境の把握」(4)感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握に関することが新たに扱われるようになり、積極的に社会参加することを目標とする高等部の教育目標と概ね合致していたが、Bさんが社会参加する姿が具体化できておらず、指導することが移乗や伝達に偏りがちであった。また、中学部で習得できていたことを指導の中心として扱っていることがあった。

結果から、各学部の教育目標を踏まえてはいたが、各学部修了段階のBさんの姿を具体的に想定して指導を展開することはできていなかったことが明らかとなった。また、次の学部の教育目標や、前学年・学部までの学びを視野に入れて組み立てた指導になりきれていなかったことも分かった。ボトムアップとトップダウンの双方の視点をもつために、今後、卒業生の生活の実際を調査するなどして、指導する時点での実態から想定される数年後の姿を具体的に描けるようになることが自立活動の指導を行う特別支援学校の教員に求められることであると考えられる。

(MIYAO Naoki, ICHIKI Kaoru, FURUKAWA Katsuya)